

今週のメニュー

■トピックス

◇塩ビサイディングの関東施工実績のご紹介

樹脂サイディング普及促進委員会

■随想

◇古代ヤマトの遠景（88）－【持統天皇（1）】－

木下 清隆

■編集後記

■トピックス

◇塩ビサイディングの関東施工実績のご紹介

樹脂サイディング普及促進委員会

独立行政法人建築研究所 坂本雄三理事長のご紹介で、茨城県水戸市千波湖湖畔にある株式会社ファーストステージ（以下ファーストステージという）を訪問させて頂けることになりました。施主に塩ビサイディングの良さを説明、多くの物件で窯業系、金属系でなく、塩ビサイディングを採用した実績があるとのことでした。

社長で、ファーストステージの設立者である飯村真樹氏と塩ビサイディングとの出会いは、今から18年前のカナダバンクーバー視察の際はじめて施工された物件を見て、日本での塩ビサイディングの可能性を感じられたとのことでした。13年ほど前からファーストステージにて取り扱いを開始、7年前には分譲住宅6棟すべてに塩ビサイディングを施工されたとのことでした。



ファーストステージ本社

ファーストステージでは90%が注文住宅とのことですが、施主に塩ビサイディングを積極的にPRし、年間30棟程度に塩ビサイディングを施工、累計すると既に200棟を超えているとのことでした。

もちろん、塩ビサイディング以外にも窯業系、金属系のサイディングを取り扱っているとのことでしたが、業者の立場から見ると塩ビサイディングはシーリング無しで、メンテナンスが殆ど不要、耐久性の良いことから積極的に薦めたい商材で、特にエンジニア系の方々（茨城県県央の周辺には数多くの日立製作所の事業所があり、他の地域に比べ技術系の方が多地域）にはライフサイクルコストの理解が得られることから塩ビサイディングを採用して頂くケースが多いとのことでした。

施主に対してインシヤルコストはさほど他素材との違いはないが、10年後、20年後のメンテナンスを考えるとメリットが大きいことを窯業系サイディングメーカーカタログ記載内容に基づき定量的に伝えると、塩ビサイディングを選択して頂く可能性が高くなるとのことでした。

情報交換後、実際に7年前に施工した分譲住宅6棟及びモデルハウスを見学させて頂きました。すべてに塩ビサイディング、樹脂サッシを採用、玄関周りにはレンガを配するなど、アクセントをつけられておりました。北海道以外で6棟も固まって塩ビサイディングが施工された事例はたぶん初めてだと思います。



7年前に施工した分譲住宅

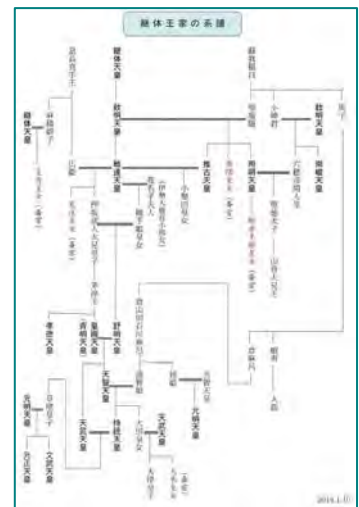
長期的なメンテナンスまで含めたコスト比較を提示すると、施主が塩ビサイディングを選ぶとのこと。施工コストだと窯業系、金属系、塩ビサイディングも大きな差はありませんが、10年後、20年後に行うシーリングの補修や、外観を調和させるための再塗装とそれを行うための足場づくりなど、長い目で見るとかなりの差が出てくるとのこと。今後の普及を期待したいところです。

■ 随想

◇古代ヤマトの遠景（88）－【持統天皇（その1）】－

木下 清隆

持統天皇が抱えていた基本的な問題は「不安」である。これまでに女帝の地位に就いたのは推古・皇極・斉明であるが、彼女たちが誕生した裏には大きな政治権力の思惑があった。従って、そのような女帝を生み出し、これを支える権力が存在していたことになる。推古天皇の場合は蘇我馬子の強大な権力が彼女を支えていた。彼等の容喙が度を超せば、これをたしなめる必要はあったが、とにかく彼女の地位は安定していた。次の皇極天皇は夫、舒明天皇の死を受けて誕生した。彼女の意思ではなく蘇我氏の思惑が大きく働いたとみられるが、このときも蘇我氏が彼女の支持勢力であった。中大兄皇子によって蘇我入鹿が殺害され、父蝦夷も、蘇我家はこれまでとみたくの屋敷に火を放って果てた。驚いた皇極天皇は皇位を放り出してしまった。



[継体王家の系譜: クリックで拡大](#)

後を継いだのは女帝の弟、孝徳天皇である。この天皇を補佐したのは当然、甥の中大兄皇子であるが、最後はこの皇子に見捨てられ、失意の中で孝徳天皇は崩ずる。後は当然中大兄皇子が皇位に就くべきだが、彼は母親を再度天皇に仕立てる。このようにして誕生したのが斉明天皇であるが、斉明天皇は皇極天皇が重祚して誕生した。この天皇の強力な支持者は息子の中大兄皇子である。

この当時、この皇子がかなりの勢力を有していたのは事実とみられる。クーデターは強力な武力のバックがなければ失敗するのが常識である。しかし、中大兄皇子達が惹き起こした「乙巳の変」は書紀の記述から見る限り、そのような武力集団の存在は見当たらない。それにも拘らず蝦夷は火を放った。蝦夷の諦め方はいかにも早すぎる。かなり搦め手の備えがあったと考えなければ、蝦夷自決の理由は説明できない。皇子を支持する勢力がかなりあったということであり、そのような動向を蝦夷はある程度察知していた可能性がある。

入鹿殺害の報に接した蝦夷は、終に来るべきものが来たと悟り、自決の道を選んだものと考えられる。このような蘇我氏の行動が、中大兄皇子の勢力の大きさをある程度想定させる。しかし、書紀では中臣鎌足の功績を際立たせるためか、多くのものが省略されている。それでも中大兄皇子が皇位に就かなかったのは不思議である。

蘇我氏は諸豪族を百年掛けて手なずけてきている。その強力な手段となったのが、氏族系譜である。各氏族の思惑と、蘇我氏との思惑とが噛み合い、多くの天皇の後裔が生まれた。このようにして築き上げられた蘇我氏体制は、蝦夷の自決ぐらいで直ちに瓦解したとは考えられない。恐らく旗幟を鮮明にしていなかった豪族達が、未だ結構居たのではなかろうか。このため中大兄皇子は皇位を継ぐことに不安があったのではなかろうか。皇子は確かに大きな勢力を抑えていた、しかし、何か決め手を欠いていたとみられる。母は息子の心配をよく理解していた。だから重祚したのである。そして年老いた母にとって、中大兄皇子は心強いパートナーだったに違いない。

このようにこれまでの女帝の権力基盤を見てくると、持統天皇の立場が如何に不安定なものであったかが良く分かる。彼女を支える勢力など何処にも存在しないのである。あるのは天武天皇の強大な権力によって構築されてきた国家体制だけである。その上に自分一人がぽつんと置かれているのである。何か国を揺るがすような大事件が発生したとしても、誰も頼るべき相手は居ないのである。藤原不比等が居ると云いたい所であるが、彼は単なる有能な官僚に過ぎない。昔の蘇我氏のように万余の兵を動かすことなど出来ないのである。そのような勢力を全部制圧したところに天皇は立っている。天武天皇は自分の成し遂げた国家統一に満足し、自分を神にまで押し上げた。しかし、残された皇后の選択肢はほとんど無かったといえる。

持統天皇の悲劇は、草壁皇子が皇位継承者としては未だ若かったことと、だから自らの意思で天皇とならざるを得なかったことである。百年前だったら、彼女の眼前からあつという間に玉座は他所に飛んで行ったはずである。しかし天武亡き後、最早皇位を奪うことの出来る勢力などはなかった。群臣を前にして棒立ちのような立場に立たされた持統天皇の唯一の支えは、皇子草壁を何とか早く天皇にすることだけだった。しかし、この皇子が持統三年四月に他界すると、彼女の望みは孫の文武天皇の即位に向けられることになる。この孫を守るために自分は何をなすべきか。頼るべきものが何も無い以上、自分が神になるしかない。夫、天武天皇が残してくれた仕組みで自分自身が神になるしか道は残されていない、これが悩みぬいた彼女の結論だったということである。

持統天皇の苦悩の中から「女神天照大神」は誕生した。天武天皇に倣っての決断だったとはいえ、女神天照大神の誕生は、倭国歴史への激震となった。営々として築かれてきた倭国の歴史という巨大構築物は、その激震によって根底から崩れ去ったのである。

<女神天照大神誕生の余波>

初代倭王が拓き、その後の諸王が築き上げた出雲国家は蘇我氏によって否定された。このとき「出雲の国譲り」神話が創作され、表向き、出雲は建国の歴史から姿を消した。それでも、初代倭王は日神として伊勢神宮に祭られていた。それを天武天皇は天照大神と名を改めて天上の最高神に仕立て上げた。伊勢神宮の祭神として、

初代倭王の御魂＝伊勢大神＝天照国照彦火明櫛玉饒速日尊＝日神＝天照大神

は、厳然として伊勢神宮に鎮座していたのである。ところが、女神天照大神が誕生すると、これまでの出雲の痕跡は残らず吹き飛ばされることになってしまった。現実世界にその痕跡を残しておくことは許されず、出雲の全てを抹消しなければならなくなったのである。

要するに初代倭王など存在していなかった、天照国照彦火明櫛玉饒速日尊など存在していなかった、との考え方を貫かなければ、女神天照大神の存在そのものが疑われるのである。そして、このような方針の徹底によって、これまでの男神天照大神、即ち天照国照彦火明櫛玉饒速日尊の居場所は無くなってしまった。伊勢神宮は対応に苦慮したはずである。彼等はこれまで天照大神を祀っていた社殿を「荒祭宮」に替えて祭祀を続け、女神天照大神のためには、新たに現在の場所に正宮を創建したと考えられる。



荒祭宮（内宮）

先に説明した滝原宮では、本殿の横に「滝原^{ならびのみや}竝宮」を併設してそこに遷した。一方を^{にぎたま}和魂、他方を荒魂と称しているが、それは方便である。伊勢神宮には昔から女神の天照大神しか鎮座していなかったとする以上、建前上「荒祭宮」など存在出来ないのである。しかし、伊勢神宮は現実問題として、このように対処して急場をしのいだと考えられる。



滝原宮
（和魂）



滝原竝宮
（荒魂）

（つづく）

この「古代ヤマトの遠景」に対し、ご意見・ご感想を頂ければ幸いに存じます。>> [\(筆者\)](#)

「古代ヤマトの遠景」: [バックナンバー](#)

■ 編集後記

29日は土用の丑の日でしたが、みなさま鰻は召し上がりましたか？今年は豊漁のようですが、ニホンウナギは絶滅危惧種に指定されたとのことで、複雑な気分ですね。

ところで、土用の丑の日に鰻を食べるようになったのは、江戸時代に平賀源内が鰻屋さんに頼まれて考え出したという説が有名ですが、日本では既に古代から鰻を食べていたようで、万葉集に次のような歌があるのです。

石麻呂に我れ物申す 夏瘦せによしといふものぞ 鰻捕り食せ（大伴家持）

「夏瘦せに良いそうですよ」と勧めています。今回の「古代ヤマトの遠景」に登場した持統天皇も鰻を召し上がっていたかも知れませんね。『うな重』ではないでしょうか。（漠）

■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)



◆編集責任者 事務局長 高橋 満

■東京都中央区新川 1-4-1

■TEL 03-3297-5601 ■FAX 03-3297-5783

■URL <http://www.vec.gr.jp> ■E-MAIL info@vec.gr.jp